（本號十面）　明治二十八年五月廿八日　第四千二百九十一號　（定價金二錢五厘）

時事新報

時事新報は全國中紙面の價も廣き新聞紙なり　時事新報社電話番號

明治廿八年五月廿八日　火曜日　（乙亥）
春彤乙未五月五日
日出午前四時三十分　入日午後六時四十七分
月出午後七時十分　入月午前三時十四分
朔洲午後七時十分
（西暦一千八百九十五年）
百四十九日目　二百十七日目
紀元二千五百五十五年
明治廿八年五月廿八日　時事新報社

時事新報

外交の大方針を定む可し

外交の術は即ち談判の術なりとは事ら其運用に就て説明したる言葉にして外交術なるものゝ結局の目的に至ては唯自國の利益を謀るの一事に帰するのみ。国際の間に二種の別あり一は貿易の利を敢得する事と又一は國勢を伸暢する事なり而して貿易上の利害の如きは之に從事する商人輩が自から抜目なく注意して決して等閑に附するみとなければ此事に付き外交術に借る所は僅に通商條約締結の手加減位に過ぎざれども若し夫れ國勢を伸暢するの一事に至ては最も外交家の苦辛鍛錬を須ひて外交の術は要するに此一事に在て存すと云ふも過言にあらざる可し蓋し國土如何に大なりと雖も兵力如何に強しと雖も孤立して列國連合の衝に當り尚ほ能く久しきを保つの國はある可らず故に大國の間に列して國勢の伸暢を謀る者は先づ第一に意氣相投じ利害相共にす可き所の者を撰んで之に交はるを以て敵どすも所の者を孤立せしむるみとを勉めざる可らず支那戰國時代の合從連衡の策若しくは我元龜天正時代に行はれる諸侯の味方積なるものは即ち其實例にして何れも利を共にする所の者と相結んで害となる者を制御するを以て目的となす者なり安政以來我國は弘く外國と交通を開くと雖も其締結したる條約は所謂偏務的の條約にして我貿易を利するが爲めに計畫したるものにあらず又速合同盟の策の如きに至ては頗る之に心を傾けたるみとなく列國を見るみとを平等一樣、恰も賓客の如くに之を待遇し一國に親交して他國を制するなどの政略は未だ曾て實際に施したるみとなし左れば甲國の公使が偶ま有力の人物なるとき又は多く甲國の文物を採用し乙國は留學したる書生が歸朝して要路に立つときは乙國の學說風俗俱に英國を受けて世に流行する等、百般の取捨去就、悉て一時の感情より生じて從て朝野共に各自其好惡の情を基として親疎の區別を立るが故に親交決して親交ならず疎外必ずしも疎外ならず其親疎は國の親疎に非ずして事ら人の親疎と云ふも可なり右の如き次第にして英と云ひ露と云ひ米と云ふ其事實の行はるゝみとは其機械の輸入せらるゝみとは皆一時の流行に止まり決して國の利害は毫て計定したる不抜の根據ありて以て親疎を分つに非ざれば我日本は開國以來未だ曾て其の外交なるものゝ根據なしと云ふも不可なきが如し然るに昨年初夏干戈を動して朝鮮に動かしてより以來事態新に一變し我國も亦本國運の政策を講ぜざるを得ざるの位置に臨めり將來國運の憂樂は全く此一事に係るみとなれば當局者は宜しく深く察して以て御畫する所なかる可らず夫れ東洋に周尾を畫し、日く、晨星日く百足知何れも我れを距るみと遠からざるに於て所謂鳳凰牛相及ばざる者なり曰く支那四百餘州日く朝鮮此三國の如きは近く我れに隣すと雖も勢微に力弱く共に攻防同盟の事を語るに足らず唯歐洲列國の中、露佛英の三國は其境土一葦帶水を隔て我れと相接し常に東洋に數十の艦隊を備へて以て彼此鬼角の勢を爲すを以て我れ若し今後の策を講ぜんと欲せば此三國の中に就て親交する所を撰ばざる可らず然り而して彼の列國亦各其利害を異にするが故に豫め之を察知するみと最も肝要なりとす偶ま彼等は東洋に於て如何に日本の親交を利とするを云ふも歐洲に於ける列國間の關係又みれよりも更に切なるものあるみとは寧ろ東洋に於て日本を敵とするの不利益あるも之を恐れず以て歐洲間盟の利益を收めんとするみとなきに非ず例へば項日の事の如き獨逸は東洋に於て取て大利害を感ずるの國柄にあらざるにも拘はらず自から進んで彼の「友誼的忠告」の主動者を勤めたりし非ずや又佛國は平素常に我に對して交誼を敦ふしたるにも拘はらず尚ほ忠告同盟の一國たり蓋し彼等は必ずしも日本を仇とするの心あるに非ざれども其自己の利益とする所更に大なるものあるよりして遂に已むを得ず斯る暴動に出でたる者と知る可し即ち彼我利を愛するよりも更に切なればなり昔蘇子瞻の関王に說て曰く明ニ於諸侯之故察於地形之理者不約親不相賣而固不趨而援兼事而不反交酬而不相憎俱强而加之以親何則形同憂而兵趨之利也蓋に英國の首相ソールスベリイ侯は同盟の事を釋して「同盟の條約は一片の故紙に過ぎず利害を共にする者の相提携するみと天然眞乎の同盟なり」と云へり同盟の極意を說く者古今東西符節を合すが如し左れば今日歐洲列國の中より我同盟たる可き者を撰ばんと欲せば先づ彼れ列國相互の關係內情を觀察するみと其だ肝要なるは多言を俟たずして明なり

千八百四十八年佛國利の民起て其宗國塊地利に叛くや勢頗る沮獗にして塊國政府も殆んど之を制するみと能はず百計盡て遂に露國の援兵を乞ひ以て辛ふじて鎮定するみとを得たり千八百五十六年英佛土の三國同盟して露國と戰ふに當り塊國は露國が義に其內亂の鎮定を援け呉れたる恩義を忘れ英佛と同盟して兵を露國の中央に進めんみとを謀れり時に普魯斯は塊國を獨逸聯邦の外に脫離して自から覇業を建んとの陰謀を抱きつゝありしが塊國を伐つに當て後顧の患なからんが爲めには露國の歎心を得るに若かざるを以て刻下塊露の間に反目の情ある見て忽ち其機に乘じ剩逸聯邦の盟故に由て塊國と結び陰に彼れが策を運らして同盟軍の露國の中央に進むみとを阻み同盟軍は之が爲めに餌食の地方クライミヤに於て數年の間不利の戰爭を續けらし財を費し「セバストポール」城を拔て、戰勝つと雖も兵を罷め終に「セバストポール」城を拔て、戰勝つと雖も兵を罷めて止みたり露國は大に普國の荒暴を怨むしたるが故に千八百六十六年普塊戰を開くに當り露國は始より普と親みて之に聲援を與し以て先年の怨に報い併せて又自家の急に報ゆるの快を取りたり此時に當て普の怨るゝ所は唯佛國の干涉のみ故に彼は百法手段を盡して佛帝を誘若し之に啗はしひるにライン河左岸の地を併呑するみとを默視するの密約を以てし遂に首尾よく佛國をして此戰爭を袖手傍觀せしむるみとを得たり和成るの後佛帝は將に普と密約したる所を實行せんとしたるに普は忽ち前言を食んで之に抵抗したり是れ即ち佛人が大に普國を怨むに至りし原因にして千八百七十一年に及て遂に兩國の間に戰端を開くみとゝはなれり初め普塊戰爭の起るや普國は伊太利を促して己れに同盟せしめ彼をして伊太利に於ける塊國の所領地を略取せしめたり又普佛戰爭の起るに先ち普國は曾て佛帝が塊國を削りて普佛の間に分取せんみとを謀りたる條約草案及び外交の文書を世に公にして塊國を怒らしめ以て塊佛兩國の交を絶り而して伊國は普と結んで以て佛が羅馬法王の事に干涉するみとを阻止せり是を以て普佛戰爭の終るまで他國の之に干涉する者更になかりき普相ビスマルクが世に大外交家と稱せらるゝは畢竟するに是等の操縱に付き神機妙算測る可らざるのありしを以てなり千八百七十六年露國は大に兵を起して土兒格と戰ひ敗績して後勝つみとを得サン ステファノ の定約を結んで土領の割讓を受るみと多し蓋し露國の意は蓋に普國が塊と戰ひ又佛と戰ふに當り露は陰に普を助けたるの偏あるのみか今度露土の戰開くるの前に普に暗に之を勸奬したるの形跡さへあれば土兒格と如何なる定約を結ぶも普は必ず之を贊助するならんと期し居たるに何ぞ圖らん英國が之に干涉するに及んで普は露を贊助せずして却て英國に左袒したるにぞ伯林大會議を開くに及んでサン ステファノ の定約を改修正して割讓地は多く之を土廷に還附するみとに一決したり此時よりして露は普に對して徹骨の怨を抱くみとゝはなれり蓋し普塊の二國が英國を助けたる所以のものは露が東歐に勢力を得るみとの過大なるを惡めばなり爾後普國は北に露の怨を受け南には佛國の常に己れを仇讐視する者あり此間に在りては如何に强大なる獨逸帝國と雖も孤立して久しきを保つみとを難し其況覺束なきを以て遂に塊伊の三國同盟なるものを組織して露佛は各孤立の姿となれり思ふに塊は獨に對して快きを得ず又伊國を威るみとを振賊も普ならざれども然れども露國の復讐に備ふるには三國の同盟に依らざる可らず伊も亦た從來の關係より云へば塊に對して親交す可き理由なしと雖も佛國に對しては到底握手を以て當る可らざるを以て是非とも三國同盟の力を借るの必要あり是れぞ即ち此同盟の堅固なる所以なりと知る可し又此間に露佛二國は其政體の正反對なるに拘はらず互に相親密ならんとするの傾あれども其同盟未だ固からざるを以て猶ほ十數年の間右三國の同盟は能く歐洲の平和を維持するみとを得たり然りと雖も年所久しきを經れば蓋熟を漸く薄らぐみとあり又穩を圖して親密を裝ふ者も長日月の間には更に不快心を增進す可き事情を生ずるみとなきに非ず左れば近來に至て塊露は漸く相親交せんとするの傾あり又伊國は三國同盟に必要なる多額の國費を供給するの力漸く衰減したれば獨塊を離れて他に同盟を求めんとするの傾あり歐洲の形勢所の如くなるを以て露國が熊に東洋に事あらんとするときは獨は乾坤の決心を以て彼れの歎心を慰めんとするの策を講じ以て露國の鋒を逸境に轉せんみとを謀ん歟は目から明なり

雜報

○倫敦タイムスの日清條約論

倫敦タイムスは日清條約及び日本の將來に就て論じて曰く今日世人の傳ふる日清條約の條件なりと云ふもの見るに一も不當過酷と思はるゝものなし清國の如き弱國に對して此條件は至當なるものにて我輩は猶ほ一層重大なるものならんと豫想せし處意外に穏和の要求なるに驚けり是れ清國の力强く此上の事を申込まば或は抵抗を試み戰の輸贏すべきを恐れたるにては又全く勢頗る沮獗にして塊國政府も殆んど之を制するみと能はず百計盡て遂に露國の援兵を乞ひ以て辛ふじて鎮定するみとを得たり千八百五十六年英佛土の三國同盟して露國と戰ふに當り塊國は露國が義に其內亂の鎮定を援け呉れたる恩義を忘れ英佛と同盟して兵を露國の中央に進めんみとを謀れり時に普魯斯は塊國を獨逸聯邦の外に脫離して自から覇業を建んとの陰謀を抱きつゝありしが塊國を伐つに當て後顧の患なからんが爲めには露國の歎心を得るに若かざるを以て刻下塊露の間に反目の情ある見て忽ち其機に乘じ剩逸聯邦の盟故に由て塊國と結び陰に彼れが策を運らして同盟軍の露國の中央に進むみとを阻み同盟軍は之が爲めに餌食の地方クライミヤに於て數年の間不利の戰爭を續けらし財を費し「セバストポール」城を拔て、戰勝つと雖も兵を罷め終に「セバストポール」城を拔て、戰勝つと雖も兵を罷めて止みたり露國は始より普と親みて之に聲援を與し以て先年の怨に報い併せて又自家の急に報ゆるの快を取りたり此時に當て普の怨るゝ所は唯佛國の干涉のみ故に彼は百法手段を盡して佛帝を誘若し之に啗はしひるにライン河左岸の地を併呑するみとを默視するの密約を以てし遂に首尾よく佛國をして此戰爭を袖手傍觀せしむるみとを得たり和成るの後佛帝は將に普と密約したる所を實行せんとしたるに普は忽ち前言を食んで之に抵抗したり是れ即ち佛人が大に普國を怨むに至りし原因にして千八百七十一年に及て遂に兩國の間に戰端を開くみとゝはなれり初め普塊戰爭の起るや普國は伊太利を促して己れに同盟せしめ彼をして伊太利に於ける塊國の所領地を略取せしめたり又普佛戰爭の起るに先ち普國は曾て佛帝が塊國を削りて普佛の間に分取せんみとを謀りたる條約草案及び外交の文書を世に公にして塊國を怒らしめ以て塊佛兩國の交を絶り而して伊國は普と結んで以て佛が羅馬法王の事に干涉するみとを阻止せり是を以て普佛戰爭の終るまで他國の之に干涉する者更になかりき普相ビスマルクが世に大外交家と稱せらるゝは畢竟するに是等の操縱に付き神機妙算測る可らざるのありしを以てなり千八百七十六年露國は大に兵を起して土兒格と戰ひ敗績して後勝つみとを得サン ステファノ の定約を結んで土領の割讓を受るみと多し蓋し露國の意は蓋に普國が塊と戰ひ又佛と戰ふに當り露は陰に普を助けたるの偏あるのみか今度露土の戰開くるの前に普に暗に之を勸奬したるの形跡さへあれば土兒格と如何なる定約を結ぶも普は必ず之を贊助するならんと期し居たるに何ぞ圖らん英國が之に干涉するに及んで普は露を贊助せずして却て英國に左袒したるにぞ伯林大會議を開くに及んでサン ステファノ の定約を改修正して割讓地は多く之を土廷に還附するみとに一決したり此時よりして露は普に對して徹骨の怨を抱くみとゝはなれり蓋し普塊の二國が英國を助けたる所以のものは露が東歐に勢力を得るみとの過大なるを惡めばなり爾後普國は北に露の怨を受け南には佛國の常に己れを仇讐視する者あり此間に在りては如何に强大なる獨逸帝國と雖も孤立して久しきを保つみとを難し其況覺束なきを以て遂に塊伊の三國同盟なるものを組織して露佛は各孤立の姿となれり思ふに塊は獨に對して快きを得ず又伊國を威るみとを振賊も普ならざれども然れども露國の復讐に備ふるには三國の同盟に依らざる可らず伊も亦た從來の關係より云へば塊に對して親交す可き理由なしと雖も佛國に對しては到底握手を以て當る可らざるを以て是非とも三國同盟の力を借るの必要あり是れぞ即ち此同盟の堅固なる所以なりと知る可し又此間に露佛二國は其政體の正反對なるに拘はらず互に相親密ならんとするの傾あれども其同盟未だ固からざるを以て猶ほ十數年の間右三國の同盟は能く歐洲の平和を維持するみとを得たり然りと雖も年所久しきを經れば蓋熟を漸く薄らぐみとあり又穩を圖して親密を裝ふ者も長日月の間には更に不快心を增進す可き事情を生ずるみとなきに非ず左れば近來に至て塊露は漸く相親交せんとするの傾あり又伊國は三國同盟に必要なる多額の國費を供給するの力漸く衰減したれば獨塊を離れて他に同盟を求めんとするの傾あり歐洲の形勢所の如くなるを以て露國が熊に東洋に事あらんとするときは獨は乾坤の決心を以て彼れの歎心を慰めんとするの策を講じ以て露國の鋒を逸境に轉せんみとを謀ん歟は目から明なり

○陸軍

大山陸軍大臣歸朝して大臣業を免ぜらるゝ

○福建臺灣巡撫

獨逸聯邦の盟故に由て塊國と結び陰に彼れが策を運らして同盟軍の露國の中央に進むみとを阻み同盟軍は之が爲めに餌食の地方クライミヤに於て數年の間不利の戰爭を續けらし財を費し「セバストポール」城を拔て、戰勝つと雖も兵を罷め終に「セバストポール」城を拔て、戰勝つと雖も兵を罷めて止みたり露國は始より普と親みて之に聲援を與し以て先年の怨に報い併せて又自家の急に報ゆるの快を取りたり此時に當て普の怨るゝ所は唯佛國の干涉のみ故に彼は百法手段を盡して佛帝を誘若し之に啗はしひるにライン河左岸の地を併呑するみとを默視するの密約を以てし遂に首尾よく佛國をして此戰爭を袖手傍觀せしむるみとを得たり和成るの後佛帝は將に普と密約したる所を實行せんとしたるに普は忽ち前言を食んで之に抵抗したり是れ即ち佛人が大に普國を怨むに至りし原因にして千八百七十一年に及て遂に兩國の間に戰端を開くみとゝはなれり初め普塊戰爭の起るや普國は伊太利を促して己れに同盟せしめ彼をして伊太利に於ける塊國の所領地を略取せしめたり又普佛戰爭の起るに先ち普國は曾て佛帝が塊國を削りて普佛の間に分取せんみとを謀りたる條約草案及び外交の文書を世に公にして塊國を怒らしめ以て塊佛兩國の交を絶り而して伊國は普と結んで以て佛が羅馬法王の事に干涉するみとを阻止せり是を以て普佛戰爭の終るまで他國の之に干涉する者更になかりき普相ビスマルクが世に大外交家と稱せらるゝは畢竟するに是等の操縱に付き神機妙算測る可らざるのありしを以てなり千八百七十六年露國は大に兵を起して土兒格と戰ひ敗績して後勝つみとを得サン ステファノ の定約を結んで土領の割讓を受るみと多し蓋し露國の意は蓋に普國が塊と戰ひ又佛と戰ふに當り露は陰に普を助けたるの偏あるのみか今度露土の戰開くるの前に普に暗に之を勸奬したるの形跡さへあれば土兒格と如何なる定約を結ぶも普は必ず之を贊助するならんと期し居たるに何ぞ圖らん英國が之に干涉するに及んで普は露を贊助せずして却て英國に左袒したるにぞ伯林大會議を開くに及んでサン ステファノ の定約を改修正して割讓地は多く之を土廷に還附するみとに一決したり此時よりして露は普に對して徹骨の怨を抱くみとゝはなれり蓋し普塊の二國が英國を助けたる所以のものは露が東歐に勢力を得るみとの過大なるを惡めばなり爾後普國は北に露の怨を受け南には佛國の常に己れを仇讐視する者あり此間に在りては如何に强大なる獨逸帝國と雖も孤立して久しきを保つみとを難し其況覺束なきを以て遂に塊伊の三國同盟なるものを組織して露佛は各孤立の姿となれり思ふに塊は獨に對して快きを得ず又伊國を威るみとを振賊も普ならざれども然れども露國の復讐に備ふるには三國の同盟に依らざる可らず伊も亦た從來の關係より云へば塊に對して親交す可き理由なしと雖も佛國に對しては到底握手を以て當る可らざるを以て是非とも三國同盟の力を借るの必要あり是れぞ即ち此同盟の堅固なる所以なりと知る可し又此間に露佛二國は其政體の正反對なるに拘はらず互に相親密ならんとするの傾あれども其同盟未だ固からざるを以て猶ほ十數年の間右三國の同盟は能く歐洲の平和を維持するみとを得たり然りと雖も年所久しきを經れば蓋熟を漸く薄らぐみとあり又穩を圖して親密を裝ふ者も長日月の間には更に不快心を增進す可き事情を生ずるみとなきに非ず左れば近來に至て塊露は漸く相親交せんとするの傾あり又伊國は三國同盟に必要なる多額の國費を供給するの力漸く衰減したれば獨塊を離れて他に同盟を求めんとするの傾あり歐洲の形勢所の如くなるを以て露國が熊に東洋に事あらんとするときは獨は乾坤の決心を以て彼れの歎心を慰めんとするの策を講じ以て露國の鋒を逸境に轉せんみとを謀ん歟は目から明なり

○徳川侯爵の

華族總代として占領地の事を終て急く歸朝

○戰地死亡者の

現はし就中を破りて

○降電被害

月十八日花蓮港に於て軍艦高木八太郎氏の玉寶寺に於て軍艦品藤しく

○

著京の報に付き

迎ふ

の利益少なからずと雖も歐洲の大勢に於て露國と離るゝの損害莫大なるを以て其心中に欲せざる所なる者は露國の意志に從て行はざるを得ざるみとあり獨り歐洲露國の中に在て洋中に介立し大陸の列國と境を接せざるが爲めに列國連合の中に加はらざる者は英國なり而して其版圖は北半球の南部各地に亙りて北の方露國と處々に境を接し常に之と敵對せり露は地中海に百兒斯灣に渤海灣に又朝鮮の東北に漸く其版圖を擴め必ず海に進して以て良好の海港を得んみとを期し不德不機以て其志を貫かんとする其一方に於て英國は版圖既に廣く單略上に貿易上に要害の地を有するみと頗る多く其目的とする所は既有の利益權勢を維持して以て他の侵略を防ぐに在るのみ

歐洲列國の形勢大略斯の如し日本は其中の孰れを眹方として執れに傾ふるを得策とするか之を斷定するは敢て難事に非ざる可し即ち大陸の諸國は何れも其本國に於ける利害の關係切なるものあるが故に假令ひ一時は我れに對して好意を表するが如きみとあるも一旦事起るの日には忽ち其事動を約變して人を驚かすみとなきを期せず現に我邦は世人と共に實際の經驗に由て此事を熟知する者なり之に反して我れと利害を同ふし所謂約せずして親しく相賀せずして固く互に相愛して相憎まず俱に强くして加す親し夫の天然眞乎の同盟國なる者は即ち歐洲の大陸に利害の關係少なくして而も東洋に於ては既成を守り他の歐洲國の侵略を防がんとする者に非ずして誰ぞや我日本人民は强く一旦の權激心を抑へ力を貯へ海軍を强うし專ら利害同しき者と交を固くして以て他日事あるの時を俟つ可きなり

○陸軍

ざるのみならず歐肝要なる大事を忘

ならば英國は其

んと欲に喜ぶもの

て拿破崙の公に

○徳川侯爵

大臣業を免ぜら

で歐洲諸國中東洋

日の所、互に猜か

華族總代として占領地の事を終て急く歸朝

○降電被害

月十八日花蓮港に於て軍艦高木八太郎氏の玉寶寺に於て軍艦品藤しく

○戰地死亡者の

現はし就中を破りて

○

著京の報に付き

迎ふ

に依り遂東半嶋を

全權を掌握し

なる事なりと云ふ其二

未だ日本の眞情を

なる處を爲さん

に頼かる好材料を

るしき影響を惹起

又此戰爭が支那に

身すら判ずるに苦

推察し得べき樣な

の敗に書き新然書

一二百年を過ぎた

が依然我獨立外

には終に日本の印

ら迷夢を醒さか

の二邊あるのみ然

國をして港灣を開

是れより商業を擴

が僅少の歲月の間

語を繰へさゝる

した後備を以て

らず又て東洋の商

一方ならざるべし

日の所、互に猜か

ざるのみならず歐肝要なる大事を忘

ならば英國は其

んと欲に喜ぶもの

て拿破崙の公に